

「歴史教科書 何が問題か—徹底検証Q & A—」(岩波書店, 2001年)に収録されている橋本治氏の文章の一節。

歴史を構築するということは未来を構築することであり, それがない歴史教育は無意味でしょう。歴史の教科書に必要なのは, 「正しい歴史」ではない。歴史を構築しうる思考の体系なのだとすることを, 改めて明確にすべきだと思います。

数学の講義を担当している僕は, こんな文章を目にすると, 「歴史」を「数学」に換えて読んでみたくなる。

数学を構築するということは未来を構築することであり, それがない数学教育は無意味でしょう。数学の教科書に必要なのは, 「正しい数学」ではない。数学を構築しうる思考の体系なのだとすることを, 改めて明確にすべきだと思います。

見事にはまった。思わずうなずいてしまった。「数学の構築が未来を構築」なんてことには疑問符をつけたがる人もいるかもしれない。しかし, たとえば僕の博士論文なんて, まさにこれだ。既知の数学的事実を検証し直す過程から新たな見識を得たのだから。

理論体系への意識が皆無なままに, 教科書に「定理」「公式」などと記載されている事項をやみくもに記憶する状態を, 過度の教科書信仰とよぶのが良さそうだと最近の僕は考えている。いくらかの教科書信仰は仕方がない。長期にわたる講義の道標としての役割があるから。しかし, 道標の正しさは無条件に信じる前に検証するべきであろう。ただ, 検証の作業はやれといわれてできるものではない。そこで僕ならばどうするか。講義ではその一例を実演してみせるのだが, 「教科書通りに進めて欲しい」と要求してくる学生が少なくない。どうも, 定期試験をうまくやり過ごすことがすべてだと認識しているらしい。理論の再構築など取り組まなくても, 試験でそれなりの点をとるだけならできるからね。

でも、危ない。教科書を「正しい数学」と認識してはばからないようでは、たとえば歴史教科書問題の重要性も認識できないのではなかろうか。度を過ぎた教科書信仰は正しさの再検証の放棄であり、安易に何らかの権威にすがりつくことにつながる。そこに国家が介入して来ようものなら、ぞっとすることがいろいろある。数学の講義を担当する者として、油断はならない。